

世界を繋ぐ服のチカラ

徳島県立富岡東中学校

二年 勘田萌衣

世界の国々に関心を持つようになったのは服のチカラプロジェクトがきっかけだった。服のチカラプロジェクトとは不要になった服を回収し、難民の子供たちに届ける活動のことだ。私が通っていた小学校では毎年五年生が主催し、取り組んでいる。私たちは実際に服を集める前に、難民について知るところから始めた。難民とは戦争、迫害、自然災害などの理由で安全を求め、他国に逃れた人々のことだ。配布された冊子をめくると、大勢の人々が線路を歩き避難する様子や大きなバケツを抱えた子供が水を求め長距離を歩く様子が目に映った。どれも衝撃的な光景だった。難民の人々の多くは受け入れ先につくられた難民キャンプや避難所で暮らしている。しかし、そこでは医療や学校などの公的サービスどころか清潔な水や食料、トイレさえ足りず、衛生的にも厳しい生活に直面しているようだ。いつ母国に戻れるか分からない不安がある中、慣れない環境で暮らすことがどれほど大変か

を知り、心が痛くなった。毎日美味しいご飯を食べて、学校で勉強し、温かい布団で眠る。この当たり前のように感じていた日常が、実はかけがえのないものであることに気づいた瞬間だった。また、特に印象的だったのは活動に協力してくださった皆さんのことだ。この活動は企画・運営をする人や服を奇寄せする人がいなければ成功しなかっただろう。中でも、一役に立ちますようにと誇らしげに服を渡してくれたた子の笑顔を今でも鮮明に覚えている。私たちが服のチカラプロジェクトというかたちで踏み出した一歩が、たくさんの人に支えられていたことを実感した。

私は現在、中学校の英語部に所属している。服のチカラプロジェクトを通して、世界と繋がる活動をしたり、世界についての知識を深めたりしたいと思った。だからだ。最近ではオーストラリアにある姉妹校の生徒に贈るプレゼントを製作した。国際輸送で送っていいものを調べたり、何が喜んでもらえるかみ

んなで案を出し合ったりした時間は、五年生の
ときの私と同じように、生き生きしていた
ように思う。

言語も習慣も考え方も違う。しかし、お互
いのことを知り、理解し合えば、人と人は繋
がることができる。そう思えるようになった
のは服の千カラプロジエクトのおかげだ。難
民問題の他にも様々な課題を抱える今こそ、
同じ地球に住む私たちが、手を取り合って協
力しなければならぬと思う。誰ひとり取り

残されない世界にするために。私が今活動で
きる範囲は小さいが、その輪を徐々に広げて
いきたい。